鳥取平野の開発の歴史と二大用水路

鳥取大学工学部　正員　道上 正規
三井共同建設コンサルタント　正員 ○池田 忠継

1．はじめに　鳥取市を抱える鳥取平野の中央部を流れる千代川は、鳥取市やその近郊の町村の開発に少なからぬ影響を与えてきた。しかしながら、この千代川を貴重な水源として利用することは土木技術の発達を見ない時代には非常に難しいことであり、千代川に対して本格的な利水活動が行われるのは近世初頭以降のことである。本研究では近世初頭に築造された左岸・大井手用水、右岸・大口用水の二大用水系の開発による鳥取市域の耕地面積への影響を文献などから調査し、その開発目的を検討した。

2．用水系の分類と開発の順序　千代川流域の用水系をその水源及び取水方法によって分類すると、溜池から取水する溜池用水系、袋川あるいは野坂川などの扇状地の扇頂を起点としている扇状地型用水系、大井手・大口用水のように千代川の本流で取水する幹川型用水系などに区別することができる。これらの各用水系に依存している領域の村落を開発年代で区分すると、図－1のようになる。[1] これを見ると、これらの用水依存領域と開発年代領域区分とは比較的合致することがわかる。このことは用水系の取水形態が時代とともに溜池取水などの小規模なものから幹川から取水するような大規模なものに遷移してきたことを示している。

3．近世初頭の水田面積と二大用水　表－1に示すように大井手用水、大口用水の開発から間もない元和4年（1618年）の拝領高を見ると両用水の灌漑領域で合計が

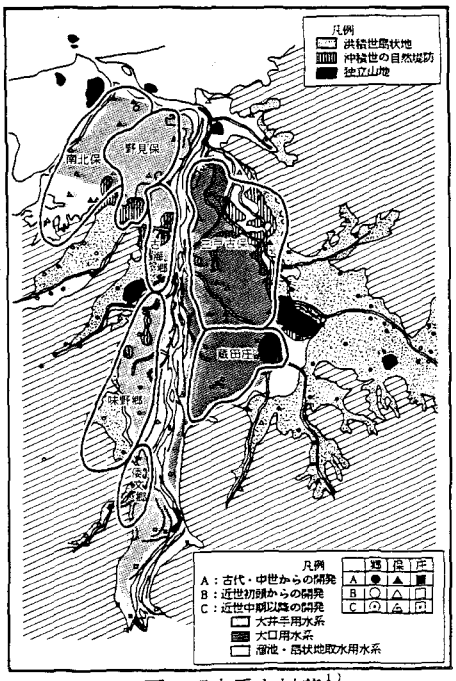

図1 用水系と村落[1]

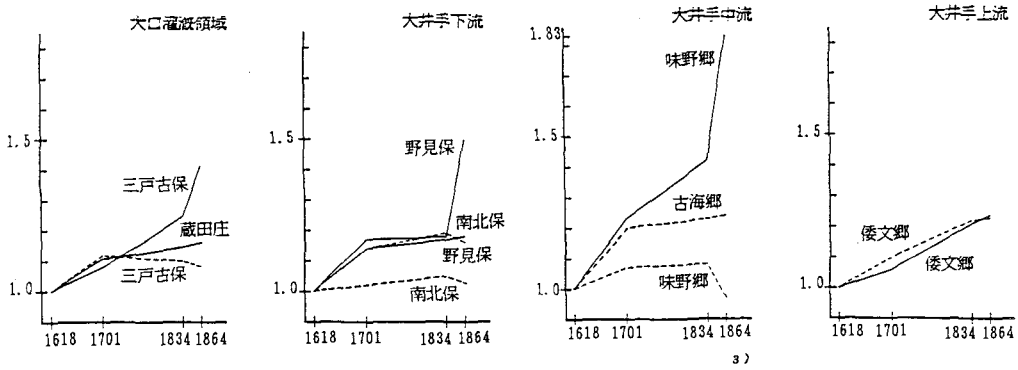

図2 石高の推移　中世型村落 ---- 近世型村落 ——

約二万五千石となっている。この当時、耕作面積1反（現在の11.88ａ）につき2石というのが、基本的な換算法であったことからその水田面積は約1500haに及ぶものと推測できる。これは現在の両用水の灌漑領域が約1800haであることを考えれば、この時期までに鳥取平野部において水田の開発がかなり進んでいたことを示している。さらにこれらの用水の灌漑領域に含まれる村落の多くが、近世以降の開発であることを考慮すると、先に述べた水田の大半はこの両用水の築造年代に当たる16世紀末から17世紀初頭にかけて急速に開発されたと考えられる。また、図－２に示すように各郷保庄の石高の推移を見ると、大口用水の灌漑領域では元禄１４年（1701年）までの藩政期初頭にかけては中世型三戸古保、蔵田庄、それ以降の後期については近世型三戸古保の伸び率が際だっている。これは享保年間（1716～1735）に近江屋安兵衛によって雲山から吉方に至る大口用水の新たなルートが開削されたことにより、中世型三戸古保の再開発がこの頃までに終了し、さらに主な新開発の領域が蔵田庄から近世型三戸古保に移行したことを示すものと考えられる。また、大井手用水の灌漑領域では大井手用水の上流域では近世型倭文（しどり）郷に比べ、中世型倭文郷がやや高い伸び率を記録しており、中下流部ではそれとは逆に、中世型村落に比べて近世型村落が高い伸び率を示している。これは大井手用水の利用目的が、上流域では主として先進的な開発領域の再開発に、中下流域では後進開発領域の開発促進に重点を置いていたものと思われる。

表１両用水の依存領域の拝領高[4]

大井手用水により灌漑される領域

村落	拝領石高（元和４年）
袋河原	４．２００
布袋	５２０．２３２
長瀬	４０８．９１６
赤子田	５０４．２９８
長谷	３４４．８４９
倭文	５８０．９６２
竹生	３６４．４６４
上味野	１０４２．５５８
下味野	１５２２．９３１
服部	７３３．７８６
菖蒲	６７０．０６８
古海	１１７４．１３９
徳尾	８８９．７１０
徳吉	６７２．５３１
安長	１０００．５６１
秋里	１０５２．４２４
江津	４０３．２２８
賀露	１７９８．６４５
湖山	１７２９．０５１
吉山	１５２．５５４
甲山	２８５．３０９
布勢	４９７．３２７
南隈	１８５．２５５
晩稲	１５３．１４０
足山	４０７．３９８
合計	１７０９８．５３６

大口用水により灌漑される領域

村落	拝領石高（元和４年）
円通寺	３３７．６２８
八坂	３２０．４９２
橋本	４０８．９０２
蔵田	４３２．０６０
馬場	１５４．５７０
数津	５０５．２１０
叶	７３０．８４９
天王島	２０８．６３２
小島	３５４．３９２
的場	２６３．３１４
宮長	５３４．８１８
大覚寺	３７６．２７７
吉成	１５９０．９８３
古市	３３８．６０２
富安	４０６．６９８
西大路	２１１．９３５
東大路	１２４．１２８
中大路	３２２．４２３
合計	７６２１．９１１

４．大口用水と「イトバ」　大井手用水には見ることができなかったのだが、大口用水には「イトバ」を円通寺や橋本など数カ所に見ることができた。この「イトバ」は大きさ、材料、形状も全てにわたって場所によりまちまちではあるが、概ね、その大きさは60cm～1m程度で形状も大小様々な石を積み上げたものがその基本的なものとなっている。また、その用途について現地の人に聞くと、現在は飲料用水の取水場としては用いられていないが、植木の水やりなどには用いられているようである。

さらに、用水系は異なるが千代川を用瀬（もちがせ）町にまで遡ると同様の「イトバ」がみられた。この「イトバ」の用途も先の大口用水のものとほとんど同じではあるが、「河原仏」という花を供えたり、古くは「イトバ」のそばに祠があったことなどから考えると、信仰にも何らかの関連があったと思われる。また鳥取城下町にも、旧袋川に沿って「為登場（いとば）」と呼ばれる階段状のものが二十数カ所存在し、年貢の荷揚げなどに用いられた。[2] これらは、その使用権をその「為登」が立地する町が管理しており地域と深く結びついていたことが窺える。

５．おわりに　本研究では、用水系やそこに立地する「イトバ」が鳥取平野の開発にどのような経済的、文化的影響を与えたのか、またその開発目的はどのようなものであったのかを考察したが、人と水との関わりを考えていく上では今後の課題として鳥取城下町の発展と袋川の開発との関連を詳細に調査、検討すべきである。

参考文献　１）建設省鳥取工事事務所：「千代川史」，1984年．２）鳥取県：「鳥取県史第６巻」，1974年．３）鳥取県立鳥取図書館：「鳥取藩史」，1972年．４）徳永職男：「稲葉民談記」，1958年